
黒の勇者と白の英雄

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の勇者と白の英雄

【Nコード】

N1932BA

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

親友と帰宅している途中の主人公はある神様の頼みで、自分のいる世界とは違う別の世界に行く事になり……。あまり無いと思う勇者と英雄のダブル出演です。こちらは投稿速度は遅いでしょうが勘弁して下さい。

ありがちな第0話

「勇者様と英雄様に敬礼！」

俺の目の前にいた大体五十人ぐらいの兵士達が一斉に敬礼してき
た。もちろん勇者ってのは俺の事だ。っていうか英雄って様付けじ
や無くな？

ちなみに俺は輝宮黒谷。てるみやくろや英雄ってのは昔の俺の親友、白坂昭道だ。しろさかあきみち
俺は黒髪に黒眼で髪が長いので括ってある。昭道の方は黒髪にな
ぜか紅眼。髪は短めだ。

「なあ、どうしてこんな事になったんだっけ？」

「それはずいぶんと前の事を思い出さなくちゃいけなくなるが、い
いのか？」

「構わないから説明してくれ。ぶっちゃけ俺は来たばかりだから、
この世界の事とかよく分からんし」

「世界の事は後でゆっくり教えてくれる人がいるけどな。
とりあえず、御苦労さま。下がってくれていいよ」

「ハッ！」

兵士達が皆下がった後、俺達は喋りながら進み始めた。さて語る
としようか。俺がこの世界に来てから今日までの出来事を。

ありがちな第0話（後書き）

二作目とさせていただきます。面白ければよいのですが。

第1話：そして少年は告げられる（1）

俺は昭道と学校に帰る途中だった。俺達は高校一年で学校にも慣れて、面白くも無い学校生活を送っていた。

「クロ？訊いてんのか？」

「ああ悪い。それで何だつて？」

「だからさ、今日の数学のさ……」

さつきから訊かされているのは、おもに昭道の愚痴だった。成績が良くないから、昭道は大体テスト前に俺に頼ってくる。俺は授業だけでしつかりカバーできるので、自学実習とかほざく大人は黙れと思っているほどだ。

『その君、ちょっと良いかな？』

「何か用か？神様」

俺の視線の先にいるのは、金髪の外人さん。これだけならまだありえない事じゃない。でも神様はさつきから空中を浮いているんだ。会って喋るようになって以来、俺はこの人を神様と呼びこの人は――。

『まあまあ、良いじゃないか。勇者の卵君は忙しい訳じゃないですよ？』

「そりゃそうだけど。でも、それとこれとは――」

関係がない。と言おうとしたがその言葉を言う前に、神様に言われてしまったのだ。何をかって？もちろん、異世界移住宣告をさ。

『日常が楽しくないと思っている。そんな君には異世界への片道切符を上げるけど、どうする?』

第2話：そして少年は告げられる（2）

何言っただ？この人は。異世界への片道切符？そういう場合は大抵言われる奴が勇者とか英雄やらになっちまうだろ？

あれ、でもこの人俺を『勇者の卵』って呼ぶよな？って事は何？俺は勇者でしただってオチか？

「別にどっちでもいい」

「お？言うねえ。話をとりあえず訊いてくれるかな？そこの『英雄の卵』君と一緒に、さ」

俺が昭道の方を向くと、なんか瞬きしながらこっちを見ていた。あれ？神様の事見えてるのか？

俺が初めて会ったとき、他の人には見えないから。とか言ってたのに。しかもなんだって？『英雄の卵』？もう完全に意味分からなくなってきた。

「私はここ以外に、もう一つ世界を担当してるんだけどさ。そこに別の神が『魔王』を生み出しちゃったのよ。それで、私のお気に入りの子にお願いされちゃったのよ。『助けて下さい』ってさ」

「そんなもん自分の世界でどうにかすりゃいいだろ？何か特別な力を持つ奴に、それこそ勇者の装備的な物を用意してやれば。俺が出張る必要無いだろ？」

「それが出来たらこんな事は頼まないよ。私のお気に入りの子以外、極めて強い特別な力を持つ子がないのよ。その点君はバッチリよ。特別な力を持つてる。」

大体君は本当はこの世界で言う『魔王』だったのよ？でも、君の隣にいる『英雄の卵』君が友達になった事で、その運命は変わり君は

『勇者の卵』になつたの」

「それは本当だったら俺は、昭道いやアキと闘う事になってたって事か？」

「そうだね。それで、どうする？向こうの世界では君を必要としている人がいるんだけど」

「それなら仕方ないか。行くよ。俺しかいないんだつたらな」

「あの、神様。俺はまだ駄目なんですか？」

「君はまだ駄目。こつちの彼の方が早くに修業を始めてたから、完成度としてはこちらの方が高いのよ」

「そつ、ですか」

アキは寂しそうな顔を浮かべつつも、次の瞬間には笑顔で振りむいた。

「頑張れよ。もしかしたら、俺もそつちに行くかもしれないからそれまで頑張れよ。クロ」

「当たり前だろ？お前こそ勉強なんとかしろよ？」

「それ言つなよ」。それでお前、彩香には言つていくのか？」

「その必要はないだろ？どうせ俺に関する記憶とかは消すんだろ？」

「まあね。君の情報が残つてると、この世界に歪が生じるしね。でも『英雄の卵』君からは奪わないよ。サービスだよ」

「それでいつ迎えに？」

「今夜零時に君の家の玄関先で。荷物とかまとめときなよ」

「そつする。お前はどうする？」

「もちろん見送りに行くよ。だから、頑張れよ」

「はいはい。それじゃ、とつとと家に帰るとしようかね」

「そつだな。それじゃあ神様、また後で」

「うん。バイバーイ。頼んだよ? 『勇者』君」

そう俺に告げると、神様はスウー、と姿を消してしまった。俺は家に帰るとアキに協力してもらいつつ荷物をまとめ始めた。

第3話：そして少年は旅立つ

「これで終わりつと。それじゃあ、ほい。この世界で最後の俺の料理だ」

「おお、旨そうだな。しかしお前の料理をこの世界で食うのもこれが最後、か。なんだか感慨深いよな」

「そうだな。お前があの時声をかけてくれなきゃ、今の俺は無かつたけどな」

「声をかけたらとんでもない喧嘩になつたじゃねえか。あれ、結構いたかつたんだぜ？」

「仕方ないだろ？あの状況であんな軽い声をかけられなんかしたら、さ。それよりもとつとと食え。温かい内が上手い料理しかないんだぞ？冷めたら本来の旨みが無くなる」

「お、それもそうだな。早いとこ食わないと」

「それじゃあ、私もご相伴にあずかろうかな」

「……いきなり登場するのは止めてくれませんか？神様」

「ま、良いじゃん。ほら、早く食べようよ」

それから俺達は、喋りながら食事をつづけた。零時までではめっちゃくちや速かった。それから俺は荷物をしまつ作業に入った。

「この荷物を汝の中へ『黒影』」

俺の足元の影が伸びて、俺の前にあつた荷物を全て呑みこんだ。呑みこんだといつても別空間に収納してるだけなんだけど。

「あ、君を送る世界はスキル制になつてゐるから」

「スキル制？それってあれか？剣術〇〇レベル、とかそんな感じか？」

「そうそう。君は魔術のスキルがマックスの1000になってるから、^{アビリティ}魔術想像の能力がつくよ」

「そりゃあ、ありがたいね。でも普段通り、俺の黒の力と名前でのみ発動するんだろ？」

「ええつとね、もう出来てる術だったら無詠唱でもできるよ。でも、新しい術は無理だから」

「了解。それじゃあ、行くとしようか」

「そうだね。準備は万端みたいだし、玄関の外に出て。もう出来上がってるから」

「わかりました。アキ、無いとは思っけどもし彩香が俺の事を覚えていたら、この手紙を渡してくれないか？」

「……わかった。でも、無いと思うぜ？」

「それでも、だよ。一種の希望だから」

「そうかい。確かに預かった」

「……ありがとう。それじゃ、じゃあな」

俺達が表に出ると、魔法陣が光り輝いていた。この光も他の人には見えない。見えるのは特殊な力を持つ者だけらしい。

「何？この光は……一体何なの？」

「彩香……。どうしてこの光が見えるんだ？いや、そんな事はどうでもいいか」

「ちよつと、どういう事よ！？クロー！」

「後の説明はアキに任せた。じゃあ、さようならだ。バイバイ、彩香。」

——我が翼、異なりし世界を飛ぶ力を与えよ。『黒翼』——

——

俺の背中から黒い翼が生えた。鳥のような常闇の色。でも、綺麗な色。それを羽ばたかせ空中に浮いている陣に向かって飛翔した。そして俺は、生まれてから16年間育った世界を捨て、別の世界に飛び去った。

第4話：異世界に到着

俺が魔法陣を通り抜けた先にいたのは、青い髪に紅色という世にも幻想的な姿をした人だった。しかも格好が巫女服。

あれ？ここって異世界の筈だよねと思ったが、後ろの集団を見るとやっぱりそうだと思いなおした。だって武装した兵士の人が沢山いるんだから。

「あの」

「あ、はい。为什么呢？」

「あなたが神様が送って下さった勇者様ですか？」

「ええ、一応は。ところで、俺がここに召喚された理由が『魔王』の出現とか訊いたんですけど」

「はい、そうです。それがどうかしましたか？」

「あそこに見えるのは、言っていた魔物の類ですか？」

「え？」

俺と巫女さんの視線の先には、大量のいわゆるゴブリンと言う類の名前のモンスターがいた。うわ、リアルだとあんな感じなんだ。気持ち悪。

「そんなこんな所まで……」

「ちよつと失礼！我が身を守れ！『黒壁』」

俺の目の前に黒い壁が表れて、跳んできた流れ矢の一本を防いだ。さっきの武装した兵士の皆さんはすでに戦闘を開始していた。

俺も行こうとすると、さっきの巫女さんが俺の袖を引っ張って止めた。

「何ですか？」

「勇者様が行かなくても大丈夫です。ですから早く私たちは城に戻りましょう」

「何言ってるんですか？俺は確かに『魔王』を倒すために呼ばれたかもしれない。」

「だけど、その前に助けられる人を助けなきゃ始まらないでしょう！」「で、ですが」

「ですが何も無い！あなたの身は守ります。ですけど、あの人達も今の俺には守らなきゃいけない人なんです！」

俺は巫女さんに結界を張った後、走り出した。しかし、ついたらいきなり戦闘とか運ねえな。

俺はゴブリンが落としている石でできた剣を拾うと術をかけた。

「この剣に我が力を。『黒化』」

剣を黒い物が纏い、刀身を構築した。これは何かを媒体する事で俺の思った物の硬度を作り出す事が出来る。今の硬度は鋼、つまり剣と同じだ。

それで近くにいるゴブリン共を薙ぎ払った。すると簡単に倒れた。うわ、なんじゃこりゃ。弱過ぎだろ？

今度は弓と矢を拾うと、構えた。もちろん弓には術をかけ始める。

「おい、兵士の皆！早くここまで撤退しろ！そいつら全員まとめて吹き飛ばす！」

「わ、わかった。退却、退却！閃光魔術用意！」

ローブを被った魔術師風味の人たちが一気に閃光魔術でゴブリンの眼をつぶしていた。これはやりやすいな。

「我が敵を射抜く力となり、その全てを吹き飛ばせ！『黒爆破』！」

矢が当たった中心点から、黒い色のとんでもない爆発が広がりゴブリンを一気に焼き尽くした。それで俺の初陣は終わった。はあ、雑魚すぎるだろう。

第5話：城に向かって

俺は歩いてさっきの巫女さんがいる場所に向かった。俺が結界を解除すると、驚いた事に凜とした表情で立っていた。しかし姿勢が良いな。

「あの、巫女さん？」

「はい？ああ、もう終わったんですか？」

「いえ、そりゃまあ、終わりましたけど。しっかしやたらと落ち着いてましたね」

「勇者様を信じていましたから。勇者様こそ、大丈夫ですか？」

「え？ああ、全然問題ありませんよ。ところでお名前をお伺いしても良いですか？」

「これは申し訳ありません。私は、このヴァルフェイル王国第3皇女アリシア・ヴァルフェイルです。以後お見知り置きを」

うん、なんとなくそんな空気はしてたけど、とんでもないビックネームだった。あれ？髪に汚れが付いてるな。

「姫様、ちよつと失礼」

「え？」

俺はなぜか懐に入っていた櫛で少しだけだが、髪の毛を梳いた。すると姫様の頬がほんのり紅く染まった。あれ？なんかおかしいかな？

「姫様？どうかしましたか？」

「い、いえ。男の方に髪を梳いてもらったのが初めてだったので」

「それは失礼しました。ところで城に向かうとか言っていないませんでしたか？」

「あ、そうでした！ベルフェン騎士団長！」
ナイトリーダー

「ああ、もうお話は終わっただんですか？」

「至急馬車の用意をして下さい。勇者様召喚が成功した事をお父様に知らせに行きます」

「準備はできていますよ。はじめまして、勇者殿。俺はアグルス・ベルフェン。第3師団を任されてる騎士団長だ。今後ともよろしく頼む」

「こちらこそ。俺は輝宮黒谷だ」

「テルミヤ・クロヤ？テルミヤが名前なのか？」

「そういう言い方なら、クロヤ・テルミヤだ。よろしく、ベルフェン騎士団長」

俺は握手をすると、馬車に乗り込んだ。っていうか、この馬車広っ！一体何人乗りだよ？それともあれか、王族ってのはこんなでかい馬車に乗るのが普通なのか？

でも二人しかいないから、スペース余りまくりだな。っていうかこのお見合いみたいな感じ、嫌だな。ホントに姫様って美人だよな。

「それでは、この世界の事を説明させていただきます」

おっと、これは真面目に訊かないと拙いな。俺は居住まいを正して、姫様と真正面で向き合った。

第6話：説明

「……」

あれ？おかしいな。さっきから真面目な顔で訊こうとしてるんだが、姫様が一向に喋ろうとしないんだけど。

すると耳の辺りが真っ赤になっていた。うん？どういうことだ？

「あの、お姫様？」

「は、はい！な、なんででしょうか？」

「いえ、それはこっちのセリフなんですが。さっきからずっと黙ってるからどうしたのかなと思っただけです」

「えーと」

「ちょっと、失礼しますよ」

俺は前髪を捲り上げると、俺の額を当てた。うーん、熱は無いみたいだけど……。

「もういいです。熱じゃないみたいだし、なんなんだろう？」

「あ、あのですね。単純に綺麗だなと思っただけです」

「綺麗？何がですか？」

「あなたの黒い瞳が、です。意志の強い感じもして、ちょっと見惚れてしまっ」

「あ、そうでしたか。良かった、熱とかじゃ無かったみたいで」

「心配をかけてしまい申し訳ありません。」

それでは取り敢えず、我が国について説明させていただきます。我がヴァルフェイル王国は、世界で唯一勇者召喚の成功例を持つ国な

のです」

「それは昔に俺以外にも勇者がいた、という事ですか？」

「ええ、そうなります。そしてこの後の段どりになります」

「え？説明はもう終わりですか？」

早っ！国の名前と勇者召喚をした事があるって点以外はもうなんでもいいんですか！？

「後の事はもつと詳しい者がおりますので。実の事を言うと、私も詳しくは知らないんです。私は神職を主としておりますから」

「はあ、なるほど？」

「それでこの後ですが、城に到着し正装に着替えてもらった後王に面会していただきます」

「わかりました。それで挨拶したらすぐに出発するんですか？」

「いえ、それは勇者様のご自由にどうぞ」

「はい？そんな事言ったら、俺は国から動きませんよ？」

「それでも構いません。皆の考えはこの国が繁栄する事ですから。でも、願えるのなら」

「願えるのなら？なんですか？」

「この世界に生きる皆を救って頂きたいと、そう思います」

このお姫様はなんだかんだで民の事を考えてるんだ。いい姫様じゃないの。俺達はその後一言も発さずに馬車でゴトゴトと揺られて、城に向かって進んでいった。

第7話：謁見への道

「それで、この格好で謁見ですか？」

城に入って、俺は姫様の言う『正装』に着替えた。紅と金色で刺繍されたド派手な服だった。正直に言えば、俺の趣味ではない。姫様は何が嬉しいのか、ニコニコしながら俺の事を見ていた。

「はい。それとこれからは私が、貴方の専任とさせていただきます」
「専任？何をするんですか？」

「これから私はあなたと行動を共にするという事です」

「……いいんですか？それ。姫さまにだって婚約者みたいなのが、いるんじゃないんですか？」

ぶっちゃけ、このマントとか邪魔だよな。話はほぼ流してるけど、何か問題でも？

「いません。私は神に仕える者ですから。それでは着替えも終わつたようですし、王の私室まで案内します」

俺は姫様に連れられて、王様の部屋まで歩き始めた。この実験動物を観察するような、視線はどうにかならないのか？

「おや、これはアリシア皇女殿下。そちらの方が勇者殿、ですかな？」

「こんにちは、ゼクエリア公爵様。そうですよ。これからお父様のお部屋まで謁見に参ります。ですので、そこをどいて頂いても宜しいですか？」

いや、こんなプライドの塊のような人間が道を譲る訳がない。むしろ、貴方がそこをどいては？ぐらい言うと思うが。そんな俺の期待をこの公爵殿？は裏切らなかった。

「何故私が、このような子供に道を譲らなければならないのですか？その子供がどけば良いだけでしょ？」

「ははははっ！こっちの予想通りの返答するなよ！」

俺がたまらずに大笑いを見ると、公爵の顔が真っ赤になった。羞恥の余り、かな？しかし、あくどい貴族つてなりしてんな。面白過ぎる。

「貴様！我がゼクエリア家を侮辱するか！？」

「あなたのご高名な家を馬鹿にしている訳じゃありません。ただあなたを馬鹿にしてるだけです」

「このっ！」

「その辺にされてはいかがですか？公爵様」

「ランスロット！これを黙っていると言うのか！？」

「あなたに王の客人を害する権利があるのですか？と言うか邪魔なのでどいて下さい。対面も出来やしない」

公爵は黙って道をどき、俺を蔑むような眼で見た後俺と姫様の横を通り過ぎて行った。そして廊下には俺と姫様と、さっき助けてもらった金髪イケメンが立っているだけだった。

「初めまして、勇者殿。俺は円卓の騎士団のトップ、ランスロットだ」

なんと伝説の人の名前を持った人とのご対面だった。おお、円卓の騎士団ってビックネームすぎるだろ？

第8話：王との面会

「こんにちは、ランスロット。お父様からの使いですか？」

「いえ、ちよつと違いますけどね」

「初めまして、ランスロット殿。俺はクロヤ・テルミヤです。今後ともよろしくお願いします」

一応礼を逸してはいけないだろうと思って、自己紹介をした。しかしこの人、強いな。俺が神様と初めて本気で対峙した時の強さがある。

しかもあれで強さを抑えてるって言うんだから、本当に一歩間違えば化物だぜ、あの人は。っていうか、神だったな。

「ふうん、なるほど。勇者を任されるだけある、って訳だね。いつか君と本気で戦って見たい物だ」

そう告げると、通り過ぎて行った。肩に当てられた手の感触がいまだに残っている。なんて威圧感だよ。そう思いながら前を向くと、目をキラキラさせた姫様の顔があった。

「……どうしたんですか？」

「ランスロットに本気で戦って見たいなんて言われるなんて、やっぱり凄いですね！勇者様は！」

「その勇者様っていうのやめて。俺の事はクロとでも呼んで下さい」「それならクロも私の事はアリシアって呼んで下さい！」

「分かったよ、アリシア。ほら早く王様の部屋まで連れて行ってよ」

「あ、そうですね。こちらです」

俺はアリシア先導の元、廊下を十分ほど歩き一室の前に着いた。

部屋の中を探してみると、一人しか気配が無かった。

アリシアが扉を開くと、圧倒的な威圧感が俺に向かって押し寄せてきた。一瞬黒の力で剣を作り出しそうになるぐらいだった。

「お父様、失礼します。こちらが神より授けられし我らが勇者様です」

「初めまして、クロヤ・テルミヤと申します。あなたがこの国の王、ですか？」

返ってきた声はまるで少年のような声だった。っていつかこの声はもう少年だろ！その姿は俺と同じくらいの身長で、子供のような外見だがその身に纏う気はとんでもないというちぐはぐな人だった。

「初めまして、いかにも俺がこの国の王ガレルザ・ヴァルフェイルだ。よろしく頼むぞ、勇者殿」

第9話：王の試練

「えーと、初めまして。クロヤ・テルミヤと申します。よろしくお願ひします」

「お？あんまり驚かないんだね」

「いえ、そりや王様の若さにも驚いていますけど。一番驚いているのはその濃密な覇気ですよ」

「これがちゃんと分かるのか。そりや安心したよ。今代の勇者は君なんだな。若いな」

「いえ、王様には一番言われたくないんですけど……。と言つか何歳なんですか？」

「俺か？俺は今年でざつと五百歳つてところかな。建国当時から生きてるけど、結構経ったもんだな」

「五百歳！？」

このナリで！？どう見ても十代にしか見えないんだけど！？いや、五百歳ともなればこの覇気の濃密さも納得だけれども！

「さて、それじゃ試験といこうか『黄剣』」

「え？——ぐっ！」

——ヒュンッ！ドガンッ！

いきなり黄金の剣を精製し、俺に向かってとんでも無い速度で振ってきた。俺は感覚でそれを察知し腕と背中に『黒化』をかけた。

腕で斬撃を何とか防いだが、そのとてつもない衝撃に吹き飛ばされた。防御は間に合ったはずなのに、扉を突き抜け廊下の柱に激突してやつと止まった。なんて鋭い剣と速さだよ。

「ほう、防いだか。なるほど、今回のほそこそ期待してもよさそうだな。しかし黒、か」

「勇者の前は魔王の可能性を持った者だったんでね。俺は聖と魔、両方の力を持つてるんですよ」

「なるほどな。だが、その強さ、その若さだと異常ともいえるな」

「一応竜程度なら倒せるぐらいに修業積まされたんでね。『黒剣』」

——ガンツ！バチバチツ！

俺の黒い剣と王様の黄金の剣がぶつかり合いスパークを起こしていた。この人はとんでもなくム力つく！いきなり試験だと言って攻撃してきやがって、ふざけんなよ！さらに俺は剣をぶつけまくった。王様もそれに対抗してくる。その堂々巡りだった。

「あんたは昔に召喚された勇者だったんだろうけどな！いきなり攻撃してくんじゃねえよ！」

「そのどんな者にも屈服しない眼。さらに気に入ったな。だが甘い」

「だったらどうするんです？その身の内の中にある聖剣でも取り出しますか？」

「気づいていたのか。『観察眼』のスキルだな？しかも結構高位の。そんな野暮な事はしない」

気づいたら弾き飛ばされて、鳩尾に拳を埋められていた。その衝撃で『黒剣』も解けて消えた。そこに残ったのは細長い棒だけだった。何かを媒介にしなきゃ俺は力を行使する事が出来ないからだ。それでも俺は、王様をにらんだ。こんなのが王様？それならこんな国は滅んじまったほうが良いんじゃないかねえの？

「いや、すまん。本当は一撃でよかったんだが、楽しくなっちゃった」

「全くお父様つたら。クロ、大丈夫ですか？」

そう言いながらアリシアは俺の負傷を治療してくれた。だんだん傷が癒えてゆき、何とか動けるレベルまで回復した。しかしなんて威力の拳だよ。

「それじゃ、君にはこれからこの国で色々やってもらわんといけない事があるが。取り敢えずはギルドで身分証明書を作ってきてな」「ギルド？身分証明書？」

「この国では、この国で暮らすために何かしらのギルドに入らないといけないんですよ。そこで身分証明書を作るんです」

「なるほど。それを作ってこいと。わかりましたよ。今から行ってきます」

「もう行くのか。それじゃあ、夜は君の歓迎パーティーをするから早く帰ってくるんだぞ」

「はいはい。それじゃ失礼しま、す！」

俺は思いつきり扉を閉めると、取り敢えず服を着替えに部屋に戻った。

第10話：ギルド登録

「昔のヨーロッパの平民みたいな格好だな。ま、俺は鎧も剣もいらないからいいんだけど」

「どうかしましたか？」

アリシアも動きやすい服装に着替えてきた。それでも貴族のお嬢様風味が漂ってるんだが。

この国のギルドはどうやら結構多種にわたるらしい。農民は農民ギルド。商人は商人ギルド。冒険者は冒険者ギルドと言った感じで、どうやら貴族専用のギルドもあるらしい。

これはとんでもない驚きだ。貴族までギルドに入っているだなんて。と言う事はあの豚みたいな、公爵？だったか。あれもギルドに入ってるんだ。城から歩く事二、三十分ほどで冒険者ギルドに着いた。

「ここが冒険者ギルド、か。結構綺麗なんだな」

「そりゃあ、依頼も受けるんですから。汚い所は嫌でしょう？」

「それもそうだな。それじゃ入るとしようかな」

「いらっしやいませ。本日のご用件はなんでしょうか？」

俺達がギルドに入ると、いきなり入口の所に立っていた女の人に話しかけられた。

「えーと、登録に来たんですけど」

「かしこまりました。それではこの紙に必要事項を記入して下さい」

「……アリシア、お願い。俺はこの世界の字をまだ書けないんだ」

「はいはい。それじゃあ、私の方で代筆しますから必要事項を教え

て下さいね」

俺はそこからアリシアに訊かれた事に答えた。と言っても名前と年齢、性別と住所だけだったが。

受付嬢は紙に書かれた事に驚きつつも、それをざっと読みとり一枚のカードを出した。

「受領しました。それではこの四角の部分に指を押し当てて下さい」

俺が指を押し当てると、名刺のような紙が光り始めてそこにどんな文字が記載され始めた。完全に記載された物を受付嬢を見ると、驚愕という顔だった。

「ゆ、勇者？あ、あなたが？」

「しー。静かに。取り敢えず受け取っても良いですか？」

「あ、はい。どうぞ」

「えーと、なにになに？」

お、どうやら俺には日本語として解釈できるようになってるみたいだな。それで内容は、と。

名前クロヤ・テルミヤ 年齢16歳 性別 男

ギルドランク F

スキルレベル 剣術83 魔術100 拳闘術74 弓術87 銃

術61 観察眼89

特殊スキル『魔術作成』・『過去視』会得

称号 勇者 異世界からの来訪者 神に認められた者 元『魔王』

の卵 聖魔使い 黒使い

「とんでもないな。我ながらそう思っわ」

「そうですね。称号がとんでもないですね」

「あなたは一体、何者なんですか？」

「ただの勇者ですよ？ま、発表されるまでこの事は黙っておいて下さいね？」

「あ、はい。……それでは登録をこれで終了します。これから頑張ってください」

「ありがとうございます。では失礼」

俺はアリシアを連れてギルドを出て行った。しかし俺のスキルレベルって結構異常なんだな。我ながら驚きだ。

「はあ、あの人が勇者、か。格好よかったなあ」

そんな声が聞こえてきたような気がするんだけど……気のせいかな？

第11話：模擬戦（1）

「あ、ようやく帰ってきたんだ。待っていたよ、テルミヤ君」

「ランスロットさんじゃないですか。どうかしたんですか？」

「いやいや、訊いたよ？あの王と斬りかかったそうじゃないか。それで君と闘いたいつて奴がいてね」

「初めまして勇者殿。私は円卓の騎士所属、ガウエインと申します。以後お見知り置きを」

「はあ、初めまして。クロヤ・テルミヤです。よろしく」

「あれ？無視ですか。そうですか。もういいよ」

「闘うのは別に構いませんけど。どこでやるんですか？」

「こちらです。ついてきてください」

俺達はガウエインさんとランスロットさんの後について行った。

しかしこの二人もあの王様と同等とは言えないけど、濃密な覇気を纏ってるな。

ガウエインさんは濃い蒼色でランスロットさんは濃い黄色だ。密度としては、ランスロットさんの方が上みたいけど。

俺達が最終的についた場所は、広い決闘場のような場所だった。

しかも観客席にはたくさんの人がいるし。これは見世物か？

「大変長らくお待たせしました。紳士淑女の皆様。これより勇者クロヤ・テルミヤ対円卓の騎士ガウエインの模擬戦を始めたいと思います！」

このランスロットさんの言葉の結果、観客が沸いた。とてつもない歓声まで上がってるし。

「さてそれじゃあ、始めるとしようか。剣を用意しよう」
「俺は別にいりませんよ。これさえあれば」

俺は長い棒のような物を見せると、『黒剣』を発動させ剣の形にした。硬度はダイヤモンド級。

ガウエインさんはどこにでもある剣を取り出した。だけどその剣が纏う気配は、聖剣にも後れを取らないだろう。

「両者準備は良いようだな。それでは試合開始！」

声と同時に、或いはそれよりも早く俺達は打ち合った。俺はガウエインさんに対してこう思った。

『この男は強い、と』

そして俺達は数合ほど打ち合いを続けた。俺は力を込めてガウエインさんを吹き飛ばし、『黒剣』を解いた。

「どういふつもりだ？私を侮辱しているのか？」

「いえ、むしろ敬意を称していますよ、ですからこの技を見せるんです。」

闇を知り、だが闇を抜く剣よ。我が下へ来たれ！聖魔剣『黒天』」

俺の持っていた長い棒から魔と聖の属性の波動が同時に流れ始め、それらが混じりあいそこには新しい剣が出来上がっていた。

「聖魔剣……だと？聖と魔は交わるなどあり得ない筈だ！」

「俺がその実例ですけどね。さて、それでは続きを始めるとしまし
ようか」

俺は剣を構えなおした。ガウエインさんも再度剣を構えた。だけ

ど俺の顔は余裕に満ち溢れ、ガウエインさんの顔は苦渋にあふれていた。

第12話：模擬戦（2）

それからはさらに苛烈さが増したと言っても過言じゃないだろう。俺の売りはあくまで魔術であって剣技じゃないのだから。

大量に剣を生成し、飛ばす。これだけでどんな地面が針山のようになっている。それにプラスして俺の剣技まで襲ってくるんだから、相手としてはたまった物じゃないだろう。

「いやあ、流石ですね。こんだけやってまだ倒れないとかっただけですか」

「はあ、はあ。……あなたこそよくそれだけやって、魔力が持ちますね」

「俺の魔力総量は異常だつて神様に言われるぐらいですから。

さてそろそろ終わりにさせてもらいますよ」

「私はまだ行けます！」

「俺が終わらせるだけです。さあ、全ての剣よ。今我が下に還り来たれ」

俺が飛ばしまくった剣、総数六百三十五本の剣が俺の周りに集まり俺を囲んだ。

「王と共にありし剣ともが砕けた時、汝はその姿を現す。顕現せよ。」
「コイルブランド聖皇剣！」

俺の周りに浮かんでいた剣達が一斉に砕け散った。そしてその身に内包していた波動を俺が持っている一本に集約させた。

総ての波動を取り込んだとき、聖魔剣は新たな領域に進化した。そう、あらゆる聖剣の王、聖皇剣へと。

はつきり言えば莊嚴の一言に尽きる。どんな聖剣もこのような波

動を放つ事は出来ないだろう。

「聖皇剣……だと？」

「真なる聖剣<エクスカリバー>には劣りますが、それでもほとんどの聖剣を凌駕した力ですよ」

「確かに。その波動はとてつもない。だが！我が剣<ガラチン>も劣りはしない！」

「これだと俺が反則みたいな物だから、貴方にはこのハンデを差し上げます。」

汝は剣の華。さあ、今この場所に大輪を咲かせよ！<剣世界>！
ソード・オブ・ザ・ワールド

これが俺が唯一使える固有結界。
ソード・オブ・ザ・ワールド
<剣世界>だ。久しぶりに使っただけ、これは結構力を消費するんだよな。

その能力は簡単だ。この場に何百何千という剣を出現させる事。しかも自分が考えた通りの形状、そして概念を纏わせる。でも、この剣の前には無意味だ。

「剣だらけだな。取っても構わないか？」

「どうぞどうぞ。これらには全て使用者が望む形状を取り、概念を纏わせる事が出来ます」

「それは便利な事だな。だが、私には概念などいらぬ。この力だけで勝つ！」

それから十分後、結果的にいえば俺が勝った。なんせ俺が作った固有結界の剣は聖皇剣コイルブランドの前には一撃で砕け散るからだ。

俺達は試合終了後、固い握手をして別れた。観客達には温かい拍手をもらった。両者をねぎらう様な拍手を。そして俺は部屋に戻り、また正装に着替えさせられる羽目になった。眠いんだがな。

花火

「いやあ、流石は勇者殿。素晴らしい剣技でしたな」

「あのガウエイン殿と対等に渡り合うとはな」

あれから数時間後、俺はパーティーの会場に来ていた。街の方を見てみると、所々で明かりがついていた。普段はこんな夜中まで起きている人は少ないらしい。

そんな噂をされている俺はどこにいるのか、と言えば俺は屋上にいた。無論、城の屋上に上がる方法など無い。俺が『黒翼』を展開して跳びあがったんだ。

「はあ、流石は異世界。星がきれいだな」

「何してるんだい？勇者殿」

「あなたこそどうやってこんな所まで来たんですか？ランスロットさん」

「君が外に行くのが見えたから、追ったら空中に飛んでいる姿が見えたから僕も登ってきただけ」

「どうやって？ここ、結構な高さですよ？」

「壁を蹴って。いやあ、こんな無茶ぶりを要求される事になるとは思わなかったよ」

あんたが勝手に登ってきただけだろうが。俺が頼んだ訳じゃねえよ。

という言葉はさすがに心に押しとどめた。そして俺は街の方向に視線を変えた。皆の騒ぎ声がここまで聞こえてくる。

「さて、俺も何かしますかね」

「？こんな場所で何をするというんだい？」

「花火でもあげますよ。俺はちよつと山の方まで行きますけど、なんだったら一緒に行きますか？」

「行く！！」

その後、俺達は近くの山まで俺は飛んで、ランスロットさんは走って向かった。明かりは俺が炎を出していたので大丈夫だった。

そして山の頂上にまでたどり着くと、俺は術式を書き始めた。普段使っているのは、俺の黒の力を使った物で魔術じゃない。つまり、これが俺がこの世界で初めて使う大規模魔術という訳だ。

「全ての者に喜びと笑顔を与えよ。大輪の花よ、咲き乱れろ！『百花大乱』！」

俺が描き上げた術式から、ヒュンと言う音と共に小さい火種が空中に昇っていきある高度にまで達すると花のように咲いた。

術式が出来上がると、俺達は魔術を使って城の人たちと街の人たちの両方に花火の事を伝え、パーティー会場に戻った。その後俺はアリシアに怒られたけど。

「綺麗ですね。クロ」

「そうだな。自分で作ったものだけど、綺麗だな」

俺は花火に夢中になっている顔を見ながら、綾香の事を思い出していた。あいつらは今どうしているかな？

頼み

「勇者殿、ちょっとよろしいですか？」

「え？…… すいません。どなたでしょうか？」

俺の目の前に現れたのは、女性と男性が二人。女性は金髪に金色の目だった。男性は蒼い髪に碧の眼と銀色に眼は閉じているのか開けているのか分からないくらい細かったから分からなかった。

「申し遅れました。私は隣国のアルヴェスタン帝国所属の聖三騎士の一人<剣>という者です。それでこちらが――」

「初めまして。<槍>だ」

「……<弓>」

「はあ、それでどういった御用件でしょうか？」

ぶつちやけ、面倒くさいような匂いしかしないんだが。この感覚は例えて言うなら、ガウエインさんのような感じかな？

「我々と闘って頂きたいのです」

「何故？」

「あなたとガウエイン殿との闘いを見ていたら、武人としての血が騒いでしましまして。お願いできないでしょうか？」

「今日は無理です。明日の昼頃にならなんとか全快してるでしょうが……三人同時に相手するんですか？そうになると、俺は剣技だけではなく、俺固有の力を使う事になりますよ？」

「構いません。それも覚悟のうえ、ですから」

「……わかりました。それでは、明日の昼頃に闘技場にて」

「ありがとうございます。それでは我々これで失礼します」

三人は一緒に出て行った。どうやら客間に向かっていったようだ。さて俺は、王様にでも頼むか。

「王、ちよつと頼みがあるんですが」

「うん？どうした勇者殿？」

「武器庫を見せていたきたいんですが」

「……いいだろう。ついてきたまえ。それでは皆様、我々はこれで失礼させていただきます」

俺は王様先導の元、武器庫に向かって歩き始めた。俺はこの城にあかるくないしな。だからと言ってアリシアが知っているとは思えない。

数分歩くと、でかい門の前に俺達は立っていた。そして王様は懐からキーを取り出すと、鍵穴にはめ込み鍵を外した。

そこには大量の剣やら弓や槍などが置いてあった。っていうか全部何かしらの特殊能力があるんだけど……。じつと見てたら目が痛くなること請け合いだ。

俺はしばらく、そこに置いてある武器を見て回った。そして一本の剣と一本の刀を手についた。剣は聖の加護があり効果は絶対に折れない。刀は妖刀で効果は総てを断ち切る、だ。

「……それでいいのか？」

「ええ。俺が使う剣術にこれほど合う物は無いでしょう。一本で防ぎ一本で断ち切る。俺は後の先を習得している訳ではないので」

「そうか。それでそれはいつ使うんだ？」

「明日、セイバーさん達との戦いで。さすがに能力は禁じますけどね」

俺と王様はそこで別れて、俺は自分の部屋に戻って寝る時用の服に着替えてベッドの中に入った。

初っ端からくそ忙しいかったな。と思いつつ意識をまどろみの中に移した。

セイバーとの闘い（前書き）

お気に入り登録していただいた皆様、ありがとうございます。これから面白くするために奮闘したいと思いますので、意見などよろしく願います。

セイバーとの闘い

「それでは両者、準備は良いかい？」

「俺は構いません」

「私達も大丈夫です」

「それじゃ、試合開始！」

翌日の午後、闘技場は昨日と同じくいやさらに増えたかな？大量の人でにぎわっていた。俺の前には三人がそれぞれ自分の武器を持っていた。

皆それぞれの名前？と同じ武器を持っていた。セイバーさんは剣。ランサーさんは槍。アーチャーさんは弓と。矢は持ってないから魔術を使うのかな？

「初手は私が行かせてもらいます！」

「あなたですか。それなら早速ですけど、これを使わせてもらおうとしましょうか」

俺は剣に聖属性を纏わせて強化した。そしてセイバーさんの剣を何とか全て凌ぎきった。この人なんなの！？ガウエインさんなんかちよつと目じゃないレベルだよ！？

「さすがにお強いですね」

「あなたも早く奥の手を見せて下さい。それを見たいが為に私が挑んだのですから」

「仕方ないな。それなら二つ、お見せするとしましょう」

俺は周りに聖剣を大量に生み出した。これだけならまた昨日と同じ事をするのか、と思うだろう。

だけど昨日創った聖剣の数は六百三十五本。今回創りだした数は、なんと千本だ。

「汝、全ての聖剣を凌駕せし原初にして真の聖剣なり。来たれ、真^{エウ}スカリパー
聖剣！」

創り出した聖剣の全てが砕け、そしてそこに内蔵されていた聖なる波動が剣に集まってきた。

総てを完全に吸収すると、剣が光り輝き全く違う形に変化した。それはただ存在するだけで強烈な聖なる波動を放ち続けていた。

「まずこれが一つ目。さて二つ目はこれですよ。今我が袂に来たれ
『黒竜ヴリトラ』」

俺から黒の力が放出され、そしてそれは段々と形を作っていた。
黒い竜へと。

——ガアアアアアアアアアアアアアアッ！

黒い竜は咆哮を上げた。今の彼らには気づかないことだったが、この咆哮はるか遠い魔王領の魔王にも聞こえていた。というか、魔王もこの戦いを見ていた。

「さて次は、と。我が身に纏え『黒竜鎧化』」

ヴリトラはその形を解き、俺に鎧の形でまとわりついた。完成し
きつたその鎧は、さっきの竜の姿をそのまま人間の形にした感じだ
った。

「準備は終わったけど。さあ、どうする？<剣>^{セイバー}さん？」

セイバーとの闘い（後書き）

はい、また更に主人公のチートぶりが発揮された瞬間でした。それでは本日の投稿はここまで。出来ればまた明日、お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932ba/>

黒の勇者と白の英雄

2012年1月9日22時07分発行